

生活の伝承 21

発行者 民家園のつどい
会長 太田 隆夫
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会文化課内
民家園のつどい事務局
TEL(024)535-1111 内線5374



室石さま

すつと書 法印さまが石も
ささんでいたところが、いつ
つまにかしなくなり法印さま
は人々から離れらっちゃんた
どある日ひよつこり法印さまは
うて来たつけ 痛がるのよう
なつていてんて「石のむろの法
印さまはあたつたん」とはや
しにされあはしてもらつ
たけ風とこか 法印さまもい
なくなつたんとどこの人が
民家園の初のすんねえ室石さま
だといさ

龜文
佐藤
貞姫

室石

荒川の渓にあり希代の大石なり、東西十八間三尺高
二丈六礫岩なり、古伝説に曰、昔此所に室石將監とい
う人あり。

智謀才覚世にすぐれ、特に幻術をなす。村人等大に
恐れおののく將監ついに狐と化して、村人に禍なす。
その禍数年に及べり、されども之を殺すこと能はず、
ついに朝廷に訴へ奉る。

これにより朝廷より、天台の座主、出羽国羽黒山の
座主に命じ給ふ。座主其命を承つて三人の修験者を選
び、彼狐を退治せむことを謀らる。三人命を承つて此
地に來り、ついに幻術の野干を殺し、民の難を祓ふ云々。
此故に稻荷宮を祭れり三人の修験者は功成つて帰らむ
とす。民等これを留めて天台座主に訴て此地に留む。
今の普門寺安樂院極樂院これなり。

一説に康保年中室石將監野干の術を行ひ、ついに畜
の性をつけ其頭のみ狐と変じ体は元の人間なり。

此室石に居住し村人に禍をなす。是を以て良僧院其
外二人これを祈り元の人間となさむとす。其時彼狐よ
り誓紙をとり其禍をなさざらしむ。其誓紙は福島普門
寺にありと云々。狐は大石の下に封じ込め稻荷明神と
祭り其祟りを除けりとなむ。

此説何ぞや疑うべき者なり。康保年中は村上天皇の
御宇なり、天保十一年まで八百八年なり、いといと疑
はし。さりながら、此地の古き傳なればさもあるか？

『信達一統志』を詰む

加藤重芳

<参考>

①野干、きつね。干支にないもの、正統でないものをいう。

②康保年中より天保十一年までは八百七十余年であるが、八百八年という

のは嘘八百。江戸八百八町にかけている。

③庄野村差出帳には、馬頭観音堂一宇とあり稻荷宮なし。

④詰。古文を現代文に直し読む。

⑤山伏修験道は明治初年「神仏分離令」によつて廃止された。

◎日ノ倉法印のこと

運動公園入口北側に元山伏の墓がある。ここは昔、山伏法印「本来院」の

屋敷跡で墓碑は

①慶元法印 文化十年

②「山の端に月は入りけりさりともどおもいし露の影もまとめて」

六峯中興大阿闍梨法印慶存 明治四年

③三峯中興大阿闍梨法印慶春 安政四年

本来院は鳥渡觀音寺の一族で、觀音寺の隠居寺。

成川の藥師堂は正徳年中慶弁上人。宝曆年中慶弁法印が居住したところである。この慶弁法印は土舟安樂院の先祖でもある。

また、本来院は歌人でもあり「信夫連」の一人として活動し上鳥渡觀音寺に「ちよ経ともむくひははてじ夜のつる子を思ふおやの深きめぐみは」と【花兄堂春芳】の歌碑がある。

花兄堂は筈をもじつたものである。

山伏修験は役の行者を祖として神仏習合を唱へ、天台は聖護院（本山派）、真言は三宝院（当山派）に別れて勢力を争つたが、徳川時代に入つて天海和尚が出て、徳川家康の庇護を受け、日光東照宮を造営するなど勢力を伸し、近世になると信達の山伏は、すべて本山派によつて占められるようになつた。室石將監の話は本山派山伏の信達制覇の物語である。

◎一統志の著者 志田正徳（号白淡）が、此地を訪れた天保十一年（一八四〇年）の庄野村人別帳によれば、この年、慶春法印は六四歳、慶存法印は四三歳、白淡先生はこの辺で室石の話を聞いたのではあるまいか：

白 淡 何か面白い話ねいがい

本来院 昔、室石將監つうのがいでない

白 淡 ううん、その嘘ホントがい

本来院 ホントだでば、書付だつてあるんだから

白 淡 ホーがい

なんて話があつたのではあるまいか：
これは私のロマンである。



山伏の墓

「福島の弁天山のこと」

—三百年前の寅年の出来ごと一件から—

太田 隆夫

福島市の御倉町地内にある、旧日本銀行福島支店役宅は「御倉邸」として、市民の利用で賑わっています。

この建物の東側は石垣になつていて、そこには阿武隈川の流れが渦をつくり、北の方へゆつたりと下つてゐるのが「御倉邸」からも臨めます。御倉町の地名となつた阿武隈川の左岸は、江戸時代に「福島河岸」がおかれ、幕府領やら福島藩、遠くは米沢藩上杉氏の「米藏」など、軒を並べて建てられていた場所といわれています。

阿武隈川の対岸にある「弁天山」は、福島河岸が設置されたころから、この名前となつたもので、古くは「椿館」と呼ばれていたと伝えています。福島河岸は、信達地方が米沢藩上杉氏領からはなれ、新しく徳川幕府に編入されたので、信夫郡の産米を江戸へ運ぶため「阿武隈川舟運」

が開発され、この「御城米」を出発させる場所として設置されました。

これが寛文四年（一六六四年）の秋以降で、舟運を請負う江戸の商人、

渡辺友意（とももち友以とも）が、自費一万両を負担し、人夫五千人で川浚いして「舟運」を開始させ、さ

らに同十年（一六七〇年）に、伊勢川浚いして「舟運」を開始させ、さ

れども、伊勢川浚いして「舟運」を開始させ、さ

らに同十年（一六七〇年）に、伊勢川浚いして「舟運」を開始させ、さ

ところが福島地方の伝承としては、

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰

隈川舟運」となつたとされています。

さて「弁天山」は、貞享二年（一

六八五年）に「阿武隈川舟運」の請

負人渡辺友意が、「川通し（舟運）」

の無事、船頭たちの安全を祈つて、

近江（滋賀県）の琵琶湖は竹生島に安置されている「弁財天」の分霊を

勧請し、渡利村の椿館西側山頂に堂宇を造営して、「舟神」として祀つた

ために、この呼び名が発生したと伝えられています。

阿武隈川舟運の「舟神様」を安置

するには、「福島河岸」を見おろせる

最適な場所、ここが椿館西側頂上で

した。「弁財天」を祀る山の対岸から御城米を積んだ船が出発できると、

渡辺友意は考えたと思われます。

とあります。

参詣した人は、福島藩主初代の板倉重寛で、江戸藩邸から福島城へ二回目の「お国入り」したときでした

山頂から降ろされ、麓の天神社へ移転した」と言わざれました。

天保十二年（一八四一年）に著された『信達一統志』の「渡利村」の頃にも、「弁財天 天神宮の東相並び

てあり これ又川岸の弁天と申せり

むかしは山の上に鎮坐なりしが

福島の城中を目下に見ることを忌み

て 後世ここに移せり」と記してい

ます。

ところが翌年の条項に「宝永七寅

六月一五日椿館弁天黒岩村向ニ被仰</

地代、年貢納入も肩代り負担し、そこへ弁財天を移したい旨、藩へ願い出ました。福島藩としての意向は、椿館の山の上から弁天さまを移せばよいので、十右衛門の願いはよからうと申し渡した、とあります。

渡辺十右衛門は、弁天さまを椿館から上流の黒岩村向いあたりへ移せと言われても、幕府領の御城米などを積み出す「福島河岸」の対岸に弁天さまを安置してあるからこそ、舟神弁財天のご利益があり見守つて下されていいると信じていたから、藩の仰せには従えない心構えだつたと思われます。

このために天神社の隣りの土地へ、弁財天堂を移すべく、その敷地代、また年貢分を自分で負担してまで、阿武隈川上流への移転に「異」を申し立て、改めて代替地を用意して願い出た渡辺十右衛門の「阿武隈川舟運」の無事故、安全に懸ける意気込みが察しられます。

こうして椿館西側の頂上に、琵琶湖の竹生島から分霊勧請して祀られた「弁財天」は、福島藩の指示で山から降ろされ、麓の天神社の境内に

隣接した場所に移されました。山上に安置されていたのは、貞享二年から二十五年間ござります。

弁天さまが、椿館から降ろされた理由という「山の上から福島城が見えて、都合が悪い」は明確であります。けれども福島藩板倉氏の初代せん。の後、二四〇のうへり

せん。けれども福島藩板倉氏の初代の殿様重寛公が、二回目のお国入りのとき、「弁財天」参詣のため初めて山へ登つた、その半年後の移動仰付けだつたことは史料の通りでした。

天さまの位置に固執し、麓に代替地まで準備した行動、「御城米」を江戸まで無事に運ぶ责任感の表現でした。渡辺十右衛門が「弁天さま」の移動に「異」を申し述べ、天神社の隣

天さまの位置に固執し、麓に代替地まで準備した行動、「御城米」を江戸まで無事に運ぶ責任感の表現でした。渡辺十右衛門が「弁天さま」の移動に「異」を申し述べ、天神社の隣りに、改めて「弁天さま」を安置した一連の動きは、「福島河岸」に働く

から降ろさせよと言ひ出した張本人
なので、麓へ「弁財天」が移され御
堂が新築された、その起因の責任を
感じ、「せめて鳥居造立程度なら、私
の名で寄進するよう」と、家老職
あたりを通して処置させてものでしょ
うか。

たところ、眼下に阿武隈川が見え、その対岸に自分の居城、いつも住んでいる本丸御殿も丸見えだったので、随行の者たちへ「ほほう　わが城も住まいも　よく見えるのお」なんて驚いて、何気なくつぶやいたので、

人たちから城下の町民まで、「福島城内が丸見えとなるのは体裁がわるいと、殿様が言つた」という「うわさ」に、「まことしやか」な物語りにふくらみ、「伝承」の空間にひろまつたと、想像しています。

人たちから城下の町民まで、「福島城内が丸見えとなるのは体裁がわるい」と、殿様が言つた」という「うわさ」に、「まことしやか」な物語りにふくらみ、「伝承」の空間にひろまつたと想像しています。

されてから二十五年ののち（初めて
椿館山上に祀られてからは五十年後）
享保二十年（一七三五年）に作成さ

岸の位置に「天神」と「弁財天」が
並んで描かれています。

「弁財天」の鳥居のところには、

財天」移転の沙汰となつたか、と推測したりしています。

「華表（鳥居のこと）重寛公、御造立、破損に及び勝里公御再立、時に享保（以下欠）」と、文字の書き込みがあります。

以後、この渡利村地内の「天神社」
・弁財天の裏手南側のところに、「天神河岸」も設けられました。

「弁天堂」は渡利村の曹洞宗高林

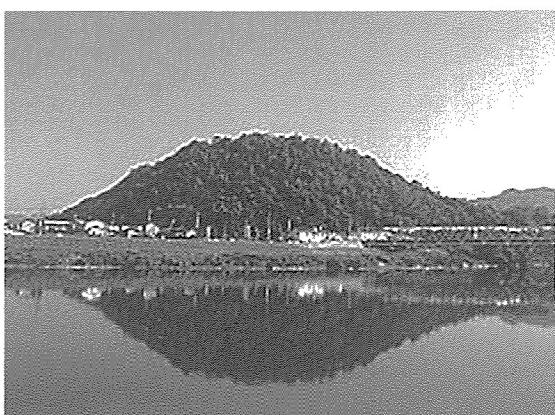
寺が別当（管理者）となつて、福島城下の人たち、福島河岸、天神河岸の船頭などから信仰が寄せられ、すぐ近くの椿館西側の山も「弁天山」と親しまれました。

それが明治のはじめ、「神仏・分離令」の布告によつて高林寺（のち瑞龍寺として再興）は廃寺、天神社境内に弁天堂があるのは不合理として、「弁天さま」の建物は取りこわしとなりました。

このとき、「弁天堂」内部に安置されていた本尊「弁財天」は、信夫郡上名倉村の曹洞宗長勝寺が「身許引受人」と申請したため、ここへ移され、落着きました。

琵琶湖の竹生島から奥州福島城下へ遠く思えばこの「弁天さま」は、迎えられ、椿館西側頂上に、「舟神」として祀られたのに麓に移され、さらには阿武隈川畔から支流の須川（現荒川）を溯り、上流の長勝寺へ安置されるとは、渡辺十右衛門は想像もしなかつた後世の現実でした。

明治二年（一八六九年）十一月、
福島城跡に信夫・伊達・安達の三郡
版図とする「福島県庁」が開かれ、



弁天山

この機関の勧めと地元渡利村長・村有志の「発議」が提出されました。

堂」でなく神道における「嚴島神社（祭神イツクシマヒメノミコト通称

弁天さまとも」が、新しく社殿建立

され、現在に至っています。

「弁財天」が頂上から降ろされて

も、習慣として長いこと「弁天山」

と呼んできた福島の人たちにとつて、

ここに新たに「巖島神社」が造営さ

れても、本質的には「弁天さま」な

ので、本来の「弁天山」の名称を遠

慮することなく呼びならわすことに

なりました。

338

卷之三

卷之三

卷之三

四

天 四

弁

1000

卷之三

卷之三

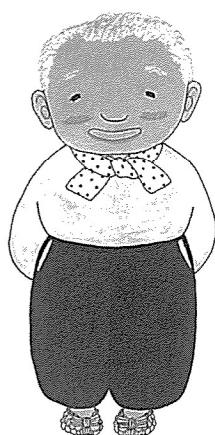
「民家園と父、秋山政一」
秋山 光身

『民家園のつどい』など、民家園で活動なさっているメンバーでも、秋山政一を直接にはご存じのない方多くなりました。パンフレットなどに、首に手ぬぐいを巻いたおじいさんのキャラクターがのっていますが、あれのモデルがその人です。デザインをしてくれた高野さんに、ベゼうりを履かせてくれと頼んで、こぞうりを履かせてもらいました。本人はお気に入りでした。

昭和四十年代の日本は高度成長期でした。道路も町も次々に新しくなっていきました。古い家は壊され昔から的生活用具も捨てられるようになりました。そのことに非常な危機感を持った人たちがいて、父もその一人でした。その人たちに明確な計画はなかつたようですが、何しろ失われてしまう建物や民具を何とか残しておきたいと考えて、とりあえず保存しようとしたのでした。それが民家園には明快なコンセプトがありました。開園した民

した。今も続いていることで言うまでもないのですが、建物も民具も実際に使つて昔を体験するということです。その頃父がよく語っていたのは、例えば孫と一緒に来たおじいさんは、昔の道具を見て、「これはな。こうやつて使うんだ。」とやつてみせることができる展示をしたいということでした。ガラス越しに指さすことをしかできない展示はしたくないと言つていました。

その民家園で、皆さんと年中行事の再現や、いろいろ端で子供たちにお話をすることを毎回楽しみにしていました。それは九十歳を過ぎても続けられました。一緒に活動をしてくださった皆様のお蔭でした。テレビ局などから取材を受けることがあります。その時の質問に対し怒つていたというか呆れていた話があります。まず最初の質問が、「この行事はいつから始まつたのですか?」。そんなことはわからないと言うのです。次の質問は、「正しい形はどういうものですか?」。例えば、盆棚の作り方は極端に言うと、一軒一軒違うので、どれが正しいということはない。ど



うしてあの人たちはあんなことばかり聞くのだろう。私が聞いてほしいのは、どんな思いで、どんな願いを込めて行事が行われてきたかなのに、とよく言つていました。そして、今は時代に年中行事の形が変わつていいのは当然なのだ。昔の形にこだわることはない。しかし、子供が健やかに育つように願う、新年を新たな気持ちで迎える気ちに変わりはない。

それを昔の人はこんな形で表していたということを再現しているのだと語つていました。そういう思いからして、民家園での活動が形式的にならず、新たな工夫で続けられることを、父は願つていると思います。

かつた勉強になつた、もう一度来園したいという気持ちからリピーターになつてもらえたならと思います。そのためガイドのときなど建物や民具の説明もさることながら、先人の創意や工夫した点の一部を体験させ、いろいろと感じとらせたいので

「みみずのたわごと」 民家園大好き人 中原 和事

市教委の教育方針に「ふれあいと生きがいに満ちた魅力ある生涯学習環境の創出」があります。この中に文化遺産の保存と活用をあげています。このような観点から感想を述べさせていただきます。

◎来園者増を願つて

観光客の誘致をはかり、地域経済に寄与したいのです。そのため、あらゆる機会と場をとらえ民家園を宣伝吹聴し、知名度をたかめ、花見山から民家園へと観光圏の拡大をしていきたいのです。一例として、グリーンツーリズムを実施している農家と手を組むことも考えられるでしょう。

また、来園者の感想として、楽しめた勉強になつた、もう一度来園したいという気持ちからリピーターになつてもらえたならと思います。

一方農村に目を向けると、機械化のよう過ごすか。SCHOOL（英、SCHOOLはラテン語の「スクラ」から。それはまたギリシャ語の「スコレ」）から。この意味は「余暇」であつたが、それから

す。レイチエル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」のくだりにあら「知ることは感じとることの半分も重要でない」を思い出すからです。

このような意味から民家園は生涯学習の場、憩いの場、レクリエーションの場としてほしいのです。

◎当時の生活を現代にいかして

民家園は都市公園の一画にあります。市民に愛され親しまれ大いに利用してほしいのです。ドイツは森の文化の国とか。ゲーテやベートーベンは森の中を散策し構想をねつたといわれています。もし、両人が都会のビルの中での生活をしていたなら、名作は生まれなかつたろうといわれています。

アカデミーはギリシャ語「アカデメイア」から。これはギリシャ神話のアカデーモスの英雄の墓があつた森の名で、ここにプラトンの学園があつたからといいます。学校の校舎は木に交わるです。民家園こそ自然体験学習の学校になると思います。

今や週休二日制の時代。余暇をどのように過ごすか。SCHOOLは進み冠婚葬祭は業者に委ねられ、人と人との結びつきや絆は薄れてきました。都會の団地では町内会の加入率が低いとか。警察白書によれば地域のコミュニケーションがよいところは、犯罪の発生率が低く、阪神

大震災で死傷者数の少なかつたところは、これまた地域のコミュニケー ションがよかつたところといわれています。私は当時の人々の結びつきをゲームを通して指導しています。

日常生活では大量生産・大量消費・大量廃棄、ここからゴミや二酸化炭素の問題が多発しています。当時の生活はすべてリサイクルで無駄がない。冷暖房の生活で一歩外に出れば放射能とか二酸化炭素が充满、暑いときは汗を流し寒いときは厚着をする。それでいて空気がきれいとするなら、どちらが文化的な生活かといえるでしょうか。

私事で恐縮ですが、私一人の俸給のときは鰯の頭を四人でつついて食べていましたが、より豊かさを求めて妻が外で働き、車を購入し人並みの生活をしてからメタボ・糖尿病となりました。冬暖かく夏涼しくして旨いものを食わせれば大抵の人間は駄目になる、この言葉があてはまり文明はなんと残酷かと感じました。

来園者は当時の人々の結びつきや無駄のない生活をぜひ学びとつてほしいのです。

「福島市民家園 ボランティア」

靈山竹生嶋流棒術顯式館道場

宗家師範 菅野 富家

大晦日の門松参り

東根郷石田地区（旧伊達郡石田村

現伊達市靈山町）靈山の麓に、藤

壩（ふじからまり）とよばれる七八

軒の集落があり相馬街道（現国道一

五号）に面し、道路に沿い石田川

が東から西に流れ、その集落の北東

の小道を登れば御戸内と言う部落が

あり、更に山道を登れば靈山の護摩

壇の下に出、また急斜面を登り護摩

壇に上がり、そこから西の方福島盆

地を眺めば絶景一目に見え、山頂の

靈山城址は直ぐ其処である、その登

山道の入口の一角に菅野家が在る、

此處に大晦日の門松参りの風習が代々

伝えられたもので、その行事について簡単に説明したいと思います。

大晦日の日は、家中正月を迎える

準備に大忙しである、山に門松用の

松を伐りに行く者、しめ縄を作る者、

女は餅を捣く用意と大晦日の晩のご

馳走料理の揃え、等々である、門松

は母屋の中央の柱の前に杭を打ち、

門松を結えて立てる、松の大きさは

高さ約一メートル幅一・五メートル

で、両枝の広がりのあるに、しめ縄

を張る、その根元には川砂を盛る、

その前には筵が敷かれる、この準備

が出来ると、神棚にお神酒を供える、

夕飯には白いご飯が多い目に炊かれ

る、それに料理はキンピラ牛蒡と大

豆、芋や凍豆腐、干大根等の煮物で、

更に塩引き（塩鮭）が一切づつが飯

台に並べられる。

それより門松参りの行事である。

その家の主人である父が、先頭

に供物のお盆を持ち、長男は提灯

を提げ、次男・三男・男孫と男子

のみが、従い門松の前に座る、門

松に供物のお盆を供え、父が灯明

を灯しお神酒を上げて、一同参拝

全を祈り、その後父がお盆の供物

を下げて、各人にお神酒を一杯と

供物の品々を一品づつ分けて与え

る。

供物（九物）の種別

米麦粟黍豆干柿

干栗 干いか 干魚
(たつくり)

この九品は、古くは戦いに行く時に携行する保存食であった。

門松参りが終わると、食卓に着く

席順は長男からの順に座り食事を始める、白いご飯は大目に炊く、鍋に

はご飯を若干残して置く、この残りのご飯は、翌元旦の朝近くの神社に

元朝参りに行くため、残りのご飯に塩引を上げお湯を注ぎ、湯漬けご飯にしてそれを食べて出かける。

この慣わしは時代は定かではないが、隣国の大敵が元日の早朝に攻めて

来た時、菅野家では女達が、昨夜大晦日に食べた残りご飯に、塩引きを

上げお湯を注ぎ、急いで湯漬けを揃え男達に食べさせ、供物を携行させて出陣させた為、菅野家の者達等は

腹ごしらえが良かつたので、戦いに勝つて帰った、隣部落の渡辺家では、

お茶を飲んで行つたため腹が空いて負けて帰った。

との古事によるもので、菅野家に伝わる大晦日の行事、門松参りと元朝参りのいきさつである。

その二

菅野家に伝承する古武術

靈山竹生嶋流棒術

左京太夫藤原保房で、竹林の中で、
槍で小太刀の達人と真剣による勝負
を行つた、榎山の持つ槍は長さ、九

尺（二・九メートル）のため竹林の中
で自由がきかず、小太刀の達人に
槍の穂先を斬り詰められて、危うく
斬られそうになつたが、短くなつた

槍の柄を、棒として槍の技を逆に利
用して相手を倒したこの時残つた柄
の長さが、六尺二寸（一・八メート
ル）であつたので、以後棒の長さを
六尺二寸とした、更にこの時編み出
した勝負手（技）を竹生嶋流棒術と
称するようになつた。

その三

棒術の宗家師範、四代目斉藤佐右
衛門は、旧伊達郡大石村字広畑（現
靈山町大石）に住んでいた、旧大田
村（現保原町）には、神陰流剣術の
道場を構える、剣術の達人藏田徳力
の門人、高野吉次がいた、（同地内に
記念碑がある）両者は、流派の強弱

を競い、不仲であった、ある日両者

雌雄決することになり、旧伊達郡新

田村（現梁川町）庄屋の庭先で、真

剣による勝負を行つた、齊藤佐右衛
門は棒を右半身に構え、左半分を相

手にさらす捨て身の構え、棒術の極

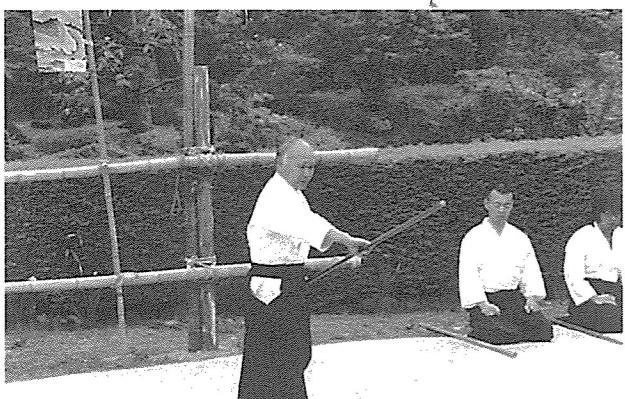
意である、「肉を斬らせて骨を碎く」
相手が斬り下して来ると同時に刀ご
と叩き落し脳天（頭部）を碎く技で

ある、「紅葉（もみじ）」の構え。

一方高野吉次の構えは「大上段」
であつた。

両者、長時間（凡そ一時半 約三
時間）構えたまま勝負がつかなかつ
た。

やがて、吉次の方が「参った」と
声を発し、同時に佐右衛門も「参つ
た」と声をかけた、吉次は佐右衛門
の捨て身の構えを見破つたため、相
打ちになる前に声をかけたのである。
以後二人は兄弟分の盃を交わす。



師範の打ち上げの技
相手の右側面を打つ技

福島市民家園の指定 管理者となつて

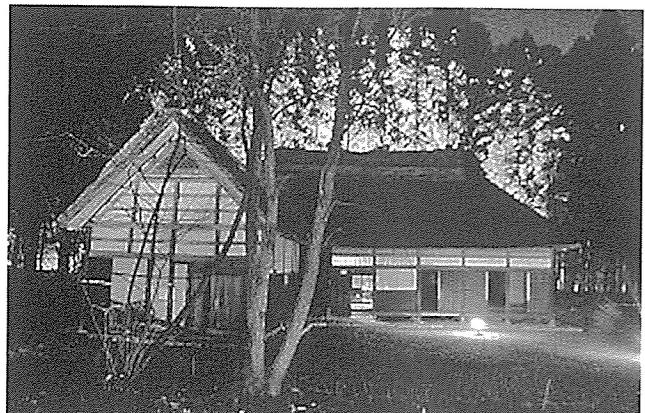
(財)福島県都市公園・緑化協会
企画課 主任主査 茂木 浩

私たち(財)福島県都市公園・緑化協
会が、指定管理者として民家園にか
かわらせていただいてから、早くも
一年が過ぎようとしております。こ
の間、福島市教育委員会並びに民家
園のつどいの皆様には、本当に世
話になりました。

県営公園以外の施設、さらには文
化財からなる施設の指定管理者とな
ることは、当協会にとって初めての
経験であり、担当者としても大きな
責任を感じながら業務に携わらせて
いただきました。

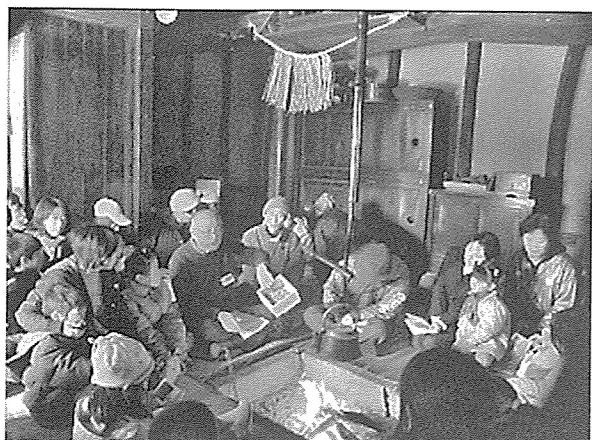
そうした中、業務開始間もない昨
年4月には、急激な入園者の増加が
見られ、一日千八百人（夜間演出見
学者を含む）もの入園者数を記録す
る日もありました。嬉しい反面、文
化財への影響が懸念されることもあ
り、長年、民家園に勤務するスタッ
フからも戸惑いの声があがりました。

その後、徐々に入園者数も落ち着きはじめ、今のところ順調に推移しております。



旧馬場家の夜間演出（昨年4月）

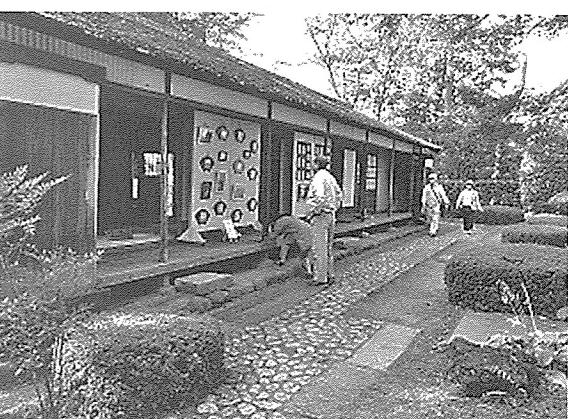
らしさに感銘を受けました。

第3回公園フォトコンテスト特別賞
「昔、むかし」岩下一男さん撮影

この成果を受け、私たちは民家園の魅力をより多くの方にわかり易く伝え、賑わいある民家園とするため、古民家の佇まいを活かしたイベントを市民の皆さまからご提案いただき実施してもらう取り組みを開始したらっしゃいました。

この成果を受け、私たちは民家園の魅力をより多くの方にわかり易く伝え、賑わいある民家園とするため、古民家の佇まいを活かしたイベントを市民の皆さまからご提案いただき実施してもらう取り組みを開始したいと考えております。

伝統文化の継承に大きく貢献していける年中行事等を大切に継続していくことに加え、市民の皆さまにも積極的に民家園にかかわっていただく参加型の事業を展開していくことで、皆さまに愛される民家園づくりに努めていきたいと考えております。どうぞ、今後ともご協力いただけますようお願いいたします。



縁側での押し花展示



古民家でのお茶会

振り返ってみると、以前から民家園と同じ公園内で勤務してきたことから、民家園についてはある程度の知識を持っていたつもりでしたが、実際のところ本当の魅力は十分解つていなかつたと反省しております。と言いますのは、一昨年まで年中行事に一度も参加したことがなかつたことによります。それがこの一年間、ほとんどの年中行事に参加させていただき、毎回再現される行事のすば

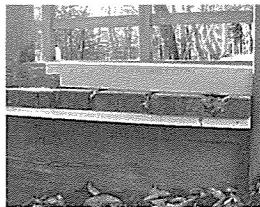
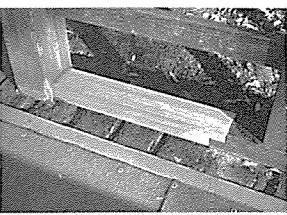
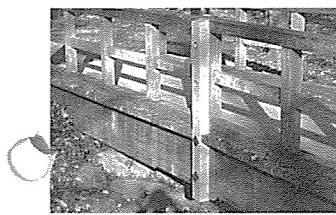
昨年、指定管理者としての立場か



旧馬場家案内板屋根修繕



橋錢小屋屋根修繕



園内橋（2箇所）補強修繕



園内椅子補強修繕

福島県建築大工業協会 福島・伊達支部の方々にボランティアで修繕していただきました。